

# 空間の周期性に着目した景観の位相

佐藤 康一

正会員 山形県庄内総合支庁建設部

(〒997-1392 山形県東田川郡三川町大字横山字袖東 19-1, E-mail:sokkenai@hotmail.co.jp)

私たちは、視野という空間に含まれる様々な地上の地物、空等の視対象の総体を指して景観という言葉を用いている。また、その空間が物理的に不均一で多様な地物で構成され、不可逆的な時間軸上で変化し続けるにもかかわらず、景観はそれらの違いを受け入れる働きをしているともいえる。本論は、景観の捉え方を視点と視対象との間にある個別の関係性ではなく、主体が視対象の総体である空間にかかわる頻度について着目し、空間体験の周期性と時間軸の周期性から景観の位相を捉えることを試みた。空間体験の項目としては、「景観」「地物」「気象」「時間」の4つを設定し、それぞれの周期性を基に、景観の働きについて、景観の位相から考察したものである。

**キーワード:** 周期性, 位相, 生活景

## 1. はじめに

景観は、局所的な視対象に焦点を当てて議論され、また、風景写真や風景画のように切り取られた空間を対象にすることがあるにしても、第一義的には、視野という空間に含まれる様々な地上の地物、空等の一部分を指すものではなく、視野に含まれる視対象の総体を指して用いられる言葉である。

視野を構成する空間は、物理的に不均一で、不可逆的な時間軸上に存在している。景観という言葉が、そのような空間の状態如何にかかわらず用いられることを考えた場合、景観には、視野を構成する要素をひとまとめにして、景観という言葉で捉える記号的な働きがあると考えられる。視野の空間は、地物の種類の多さや視野の範囲の多様性、時間軸上の継続的な変化などにより、非常に複雑であることから、その様相は、視野毎に異なるにもかかわらず、私たちは、それらは全て景観という言葉で表現している。すなわち景観という言葉は、そのような違いを受け入れる性質を有しているといえる。

篠原修は、景観把握モデルを提示し、その性格と特徴について、「景観をデザインする立場を強調したもので(中略)デザインに結びつきやすい景観分析を可能にするところにその特徴がある。」としながら、「包括性をねらったモデル」「景観を構成する

要素間の空間的關係を重視したモデル」「時間の流れによって変遷する景観を扱うことはできない。」<sup>1)</sup>と述べている。これまで多くのシーン景観を対象にした景観研究は、篠原が提示したモデルのように景観を包括的に捉えつつも要素間の空間的關係を重視するという考え方が取り入れられているように思う。主体の生活に取り入れる借景、生業の中で景観の一部を利用する山あて、絵画を通じた景観分析、既存の空間に新たに構築する人工建造物のデザイン・設計思想に関する研究等、シーン景観の主対象となる地物や現象と主体との関係にアプローチしているものは多いものの、景観体験に係る視野を構成する空間に対する主体の頻度や時間軸が有する周期性との関係性にアプローチしているものは少ないと思われる。前者は、主体の位置と主対象となる地物等の位置、形態、色彩、構図等の関係を重視するのに対し、後者は、当該景観を経験する頻度を重視するところに違いがある。後者の捉え方は、主体と主対象との位置関係等による景観の差異とは異なり、景観の経験頻度による景観の働きに差異が生じるという仮定に基づいたものである。

本論は、こうした観点から主体が空間にかかわる頻度について、空間体験の周期性を探り、これに時間軸における時刻等の周期性を足し合わせた景観の位相に特徴を求めることを試みるものである。

なお、本論では、景観、風景、景色、眺め、眺望など、これら類似の用語の違いに焦点を当てないため、代表して「景観」ということばを用いることにする。ただし、「風景写真」「風景画」「原風景」のように普通名詞で使用されている単語については、風景を景観に変えずそのまま用いることにする。

## 2. 空間体験の周期性

### (1) 景観の周期性

日常生活におけるリビングの窓越しに見る景観、通勤・通学路上で見る景観、職場・学校における景観等は、意識的に特定の視対象を選定したり、視点場を選定したりしていないという点において、ほとんどが目的的に眺められていない。これらの景観は、短い周期で繰り返し眺められることにより、空間の構成要素の変化が小さく安定した日常的なものになる。仮に意図的に借景を取り入れたリビングの窓からの眺めであっても、繰り返し眺めることにより、当たり前のように眺められる景観になる。これらの景観は、繰り返し眺めていることから、視点の移動による景観の変化は予測可能な景観となる。眺める頻度からすれば主体にとって最も身近な景観である。中村良夫は、日本の都市の地相の骨格が織りなす情景により、おおよそその位置と方向がおのずと知れることについて、「風景の冥々の加護に導かれて、人びとはそれと知らぬ間に、都市空間のなかにしかと定位し投錨し、心の無事を得ているのである。」<sup>2)</sup> といっている。中村がいう「日常生活環境の美的整序の問題」<sup>3)</sup>を除けば、地相ではないにしろ、短い周期で景観の構成要素を日常的に繰り返し眺めることは、主体が定位と安心を獲得していると推察される。これについては、非日常と思われがちな景勝地などの観光地における景観についても、そこに居住する主体にとっては、繰り返される日常的な景観であり、同様の効果が得られる。

このような日常の生活空間の景観は、生活景と呼ばれ、本論においては日常的な景観を生活景と呼びこととする。生活景に関して、中村は、風景を自然景と生活景に分け、18世紀の浪漫主義における風景思想の流れの中でそれぞれについて言及している。その中で、生活景については、ワーズワースが住んだライダルマウント荘を例に挙げ、「たとえ、大自然に踏み込んでいったにしても、自分の身体という日常性を離れて風景はないことに、あらためて注意が向けられてよい。」と生活の近景が風景論にとって重要な意味を持つと述べている。ただし、日

本では、「生活空間と風土に鑄込まれた思想性を見つめる視力をくもらせた。」ことが、生活景の貧困を招いたとも指摘している<sup>4)</sup>。生活景は重要であるが、その美的整序については問題があるという認識である。生活景に関しては多くの研究が成され、吉丸俊和ら<sup>5)</sup>の研究によれば、少なくとも当該研究で分析している文献は83編ある。吉丸らは、生活景を次の4つに分類している。(1)過去に存在した記録や記憶に存在する景観、(2)日本の伝統を継承している景観、(3)日常的に目にする景観、(4)ライフスタイルの変化に伴い新たに生まれる景観の4つである。(3)の景観については、空間の改変、文化の断絶等により破壊された生活空間の価値、課題を明らかにし、環境改善の取組みにつなげようとする景観を指しており、本論の景観と主体のかかわりの頻度で現状の空間を総括的に捉えようとする視点とは異なるものである。

主体が属する生活空間以外の場所で眺める景観については、主体が当該景観を眺める頻度は少なく、眺める間隔の周期は長いものとなる。観光地を訪れたときなどに初めて眺める景観は、当該主体の生活景との比較において、類似の景観として感じたり、新たな景観として感じたりする。海外の観光地に限らず国内においても、一度切りしか訪れない土地の景観は、非周期的な景観というのが適当であろう。原風景と呼ばれる景観の眺めは、かつて生活景だった景観を長い間隔をおいて眺めるときなどの受け止め方であり、景観の改変の有無やその度合いにより、懐かしさを覚えたり、驚いたり、落胆したりすることになる。また、ある時を境に、何々景観50選等に選定され差別化が図られる場合などは、当該景観を生活景として眺めていた主体にとって、多少の見方は変わるかもしれないが、大きく変化するのは、ここを生活空間としない主体の景観の受け止め方の方である。

このように空間体験の周期性による景観の捉え方の違いは、景勝地等が有する価値の有無によらず成り立つ。

### (2) 地物の周期性

生活景を構成する地物の周期性について、自然物と人工物に分けて考察する。初めに自然物については、毎年繰り返される新緑に覆われた里山、冬期間の荒れ狂う波が特徴的な海岸、田植え後の緑の田園、稲刈り前の黄金色の田園、河川堤防や都市公園等の桜並木等は、1年を周期として事物の変化が繰り返される。これら事物の変化は、後述する気象現象が大きく影響して現れるものであるが、事物の存在そ

のものは、気象現象から独立して存在している。建築物等の人工物の地物については、伊勢神宮における20年に一度の宮地（みやどころ）を新宮（にいみや）に改める式年遷宮の宮のように長期の周期性を有するものから、毎年のクリスマスのイベントに出現するイルミネーション、花見やお祭りの時期に神社や路上に並ぶ出店等まであるが、他の多くの人工物の地物は、一般的に時間軸に沿って経年変化を続ける非周期性の要素である。

### (3) 気象現象の周期性

気象現象の周期性については、気象要素で考察する。気象要素には、天気、雲量、雲形、雲高、視程、日射量、日照、気圧等がある。天候の晴れ、雨、くもり、その他雲形、視程、気圧などは繰り返される現象であるが、一定の周期で繰り返されていない。

春夏秋冬は1年を1サイクルとする周期性を有するが、「四季が顕著ではっきりと区別できるのは、中緯度にあつて、かつ気団の勢力変化が大きい地域（おもに内陸や大陸辺縁部）である。例えば、日本は概ね北緯25度から45度に位置し、小笠原気団（夏）、シベリア気団（冬）、オホーツク海気団（梅雨）、揚子江気団（春、秋）という複数の気団の影響を受ける。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%AD%A3>）」という解説からわかるように気象要素の影響により、四季を形成する気団の勢力の変化は一定ではなく、暦の上での四季の扱いのように期間の区切りが明確でないだけでなく、毎年、同じ現象が繰り返されているとは言い難い。

気象に関する空間体験は、規則正しい周期性ではないにしても、人為的に定めた気象要素や気団のそれぞれの状態の範囲内で繰り返されているといえよう。

### (4) 時間の周期性

時間については、不可逆的に経過する性質を有するが、一方で、人為的な区分により年月日、時分秒という規則的な周期性を有している。

夕焼けや夜景など景観の様相に影響する時間的区分について、気象庁は、1日の時間細分を「明け方」「日中」「夕方」「夜」等、17分類している（[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo\\_hp/toki.html#A23](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/toki.html#A23)）。これらの時間区分は時刻のように明確に定めておらず、「頃」という幅を持たせた説明がなされている。

## 3. 空間体験の周期性の整理

前章で述べた「景観」「地物」「気象」「時間」の4項目について、空間体験の周期性を整理する。

景観について、生活景は、主体の生活の場の景観であることから、生活行動の範囲の景観を視対象とし、基本的に眺める周期は毎日（1日）になる。非生活景は、生活行動範囲外の景観が視対象となり、その範囲は世界レベルまで広がる。非生活景を眺める周期は、視対象の範囲や主体の行動の機会に応じて、長かったり、短かったり、1回切りの場合もあり、非周期的である。

地物について、自然物は気象の影響を受け、1年を周期とするものが多いが、人工物に関しては、時間軸に沿って経年変化を続ける非周期の性質を持つ。非周期であるが、その変化の速度を感じられないくらい遅いものもある。自然物と人工物は、どちらか一方が空間を専有することはなく、一般的には混合状態で存在する。

気象現象については、定められた気象要素によって表現され、繰り返し出現するものの非周期的である。また、気象要素で定義づけられる気団の状態によって感じている四季は、春夏秋冬の順序こそ規則的で周期的であるが、現象としては必ずしも規則的ではなく非周期的である。

時間については、非周期的に経過するが、人為的に取り決めた年月日や時刻等の区分で捉えた場合、周期的に変化している。また、前述の1日の時間細分は、時刻で明確に区切っていないため順序については周期的であるが、現象としては必ずしも規則的ではなく非周期的である。

以上をまとめると表1のようになる。景観は、名勝、景勝地にかかわらず、視野が空間体験の範囲を規定することもあり、眺めの主体にとって生活景か非生活景で周期性が分類される。他の地物、気象、時間の項目については、生活景又は非生活景の中で周期的なものとは非周期的なものが混在する。

表1 空間体験の要素とその周期性

	周期的	非周期的
景観	生活景	非生活景
地物	主に自然物	主に人工物
気象	人為的区分 (e.g. 四季)	気象現象
時間	人為的区分 (e.g. 年月日・時刻)	時間経過

## 4. 景観の位相

周期性の性質を有する生活景と非周期性の性質

を有する非生活景に分けて、それぞれの景観の位相について考察する。

生活景の位相は、景観そのものが周期的であるため、景観が存する空間の地物、気象、時間が周期的であれば、それぞれの項目間で位相のずれはあるにしても、周期的な眺めになる。周期的に眺める景観は、見慣れた景観で、主体の定位も容易で、安心感と安定感が得られやすい。また、非周期的な地物、気象、時間も生活景に存するため、生活景の周期の範囲内で非周期的な位相の眺めになる。周期的な生活景の中の非周期性は、美しい夕焼けの景観やスーパームーンの景観など、見慣れた景観の中における特殊な景観がこれにあたるといえよう。

一方、非生活景の位相は、主体にとって当該景観が非周期的であることから、地物、気象、時間が周期的又は非周期的のどちらの場合も景観としては非周期的な位相の眺めになる。一旦その地に住み始めると、地物、気象、時間の項目は、周期的なものと非周期的なものとして存在が変化することになる。

生活景の位相は、非周期的項目によって生活景の範囲内で位相が変化するのに対し、非生活景は、これを構成する項目の周期性にかかわらず、景観の総体を単位として非周期の位相が変化することになる（図-1）。

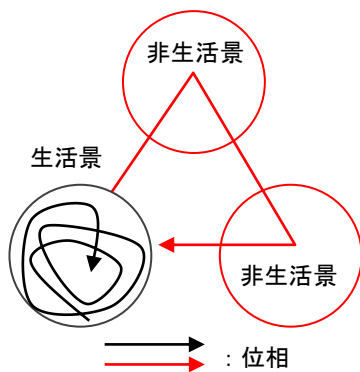


図-1 生活景と非生活景の位相

## 5. まとめ

本論は、空間を包括的に、そして視野の総体を表現する景観の働きを前提にしたときに、空間の視野レベルで景観の変化をもたらしているものは何か、言い方を変えれば、景観は何からできているのかを考えたものである。これまで多くの研究で採用されているように、空間の一部の現象に焦点を当てたアプローチでは、当該部分の空間的又は現象的特長を掘り下げることができるとしても、当該部分の周辺

を含めた景観において、眺める主体に対する時間的、空間的な影響力がどの程度あるのかや、同じ視点又は同じ視点場においても絶えず変化する視野における当該部分の景観的位置づけ、主体間における視覚的吸引力の違いをどのように扱うかなどは、研究の対象外となっている。本論は、その対象外の部分のさらにその一部に焦点を当てたものである。

本論の適用について、最近の研究で確認してみたい。林<sup>6)</sup>の一時的に出現していた大坂大川の中洲の納涼場に関する研究、池田ら<sup>7)</sup>の中心市街地の広場における人々の滞留特性の分析、神山<sup>8)</sup>の気象を源泉とした風景の船乗りの日和見と観望天気に関する研究を本論の景観体験の分類に当てはめると、それぞれ、中洲は、周期的な生活景の中の非周期的な事物、人々の滞留特性は、周期的な生活景における公園という定点に見られる人の集合行動状態という非周期的な事物、船乗りの気色は、過去の生活景（現在は非生活景）における非周期的な気象現象と周期的な人為的気象区分の気象に係る現象として捉えられるように、既存の研究も本論の景観の位相で捉えることはできる。

本論は、前述のように美的秩序の問題を対象にしていない。しかし、生活景という概念を使用したことにより、さらに周期性の概念を用いることにより、見慣れた生活景の中の非周期的な体験や、同じ景観に対する主体間の周期性の違いにより異なる非周期的な景観に見られる位相のずれを捉えることが、美的判断の要因を抽出する一助になると思える。

## 参考文献

- 1) 篠原修：新体系土木工学 59 土木景観計画，pp. 34・36，技報堂出版株式会社，1982
- 2) 中村良夫：風景学入門，p. 57，中央公論社，1982
- 3) 前掲 2)，p. 18
- 4) 前掲 2)，pp. 8-21
- 5) 吉丸俊和，柴田 久，石橋 知也：生活景の捉え方と一般市街地における景観施策への活用に関する考察，景観・デザイン研究講演集 No. 3，pp. 134-141，2007
- 6) 林倫子：大阪大川中洲納涼場の開設経緯と営業実態，景観・デザイン研究講演集 No. 15，pp. 67-71，2019
- 7) 池田昌弘，田中尚人：久留米市中心市街地のまちなか広場における滞留特性に関する分析，景観・デザイン研究講演集 No. 15，pp. 390-397，2019
- 8) 神山藍：気象を源泉とする能登の気色－観望天気に着目して－，景観・デザイン研究講演集 No. 15，pp. 52-61，2019